Eternal a Contract

彩世 幻夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｅｔｅｒｎａｌ　ａ　Ｃｏｎｔｒａｃｔ

【Ｎコード】
Ｎ４５４１Ｚ

【作者名】
彩世　幻夜

【あらすじ】
それは、永久の約束。
それは、魂を懸けて誓った大事な誓約。
約定を果たすため、命を懸けて廻した運命の歯車が、時を越えて噛み合い、新たな物語が今、回りだした――。

第壱話　the ring of a bell（前書き）

※この作品は、吸血鬼モノです。
※吸血シーンや宗教的表現、また、バトルシーンにおける多少の残虐表現が含まれます。
※恋愛を描いています。18禁表現はありませんが、軽めの性的描写があります。
※苦手な方はご遠慮下さい。

◆評価・感想など頂けましたら、嬉しいです。

第壱話　the ring of a bell

「ハロウィンパーティ？」
パンっ、と顔の前で手を合わせた彼が差し出した招待状（カード）に目を落とす。
「頼むよ千恵（ちえ）……助けると思って！　一緒に来てくれよ」
そう言って、今度は白い封筒を差し出し、中からチケットを二枚出し、机の上に置く。
パーティーに行くのに必要なチケットだ。見ると、右端に小さく¥１２００と書かれている。
「あ、大丈夫！　そのチケット、兄貴に貰ったヤツだから」
長年、自宅の隣人兼幼馴染みの腐れ縁である彼に誘われているのは、駅前にあるライブハウスで行われるハロウィンイベントだ。
「でも、夜１０時からって……ちょっと遅くない？」
カードに書かれた時間に渋い顔をすると、すかさず、
「それも大丈夫、俺が責任持って送るし。それでも心配なら兄貴に車出させるから！」
と、畳み掛けるも、
「……って、千恵ならそういう心配はいらないだろうけどさ」
と、余計なひと言を後にくっつけるのが夏也（なつや）だ。
「そのパーティーライブ、香奈（かな）ちゃんも出るんだ」
夏也の兄で、やはり幼馴染みの悠（はるか）は、大学の友人たちと組んでバンドをやっている。
その兄にパシられる格好で出入りしていた例のライブハウスで彼がどっぷりハマり込んだのが、何とかいうバンドでヴォーカルを務めているという“香奈”という女の子で。
「いつもみたいに、悠兄（はるにい）に付いて行くんじゃタメなの？」
「それだと俺、裏方にしか出入り出来ないから、香奈ちゃんのライブが見られないんだよ。でも表から入るには……」

机に置かれた二枚のペアチケット。
「ハロウィンてさ、ヨーロッパとかアメリカとかの行事だろ？だから、あっちの習慣に習おうって事でさ……」
つまり、男女ペアでなければライブハウスに入る事すら出来ない、という訳だ。
「こんな事頼めるの、千恵しかいないんだよ、頼む！」
「私、こういう場所は右も左も分からないよ？　こういうの、風花（うか）の方が詳しいと思うんだけど」
千恵は、もう一人の幼馴染みの親友に話を振った。
「ごめん、私その日は都合つかなくて」
だが、彼女は意味ありげな目配せを夏也に送りながら肩をすくめた。
「なあ、頼むよ。飲み物代くらいは奢るからさ。香奈ちゃん以外にも幾つかのバンドがライブやるんだ。行ってみれば千恵も気に入るバンドがあるかもだぜ？」
夏也の台詞に休み時間の終了を告げるチャイムと風花の舌打ちが被る。
「まあ、私でいいなら……」
「いいのか？　助かる！」
小躍りでもしだしそうな軽やかな足取りで自分の席へと戻っていく彼を見送りながら千恵は小さくため息をつき、机に残されたカードとチケットを見下ろす。
「１０月３１日……、か……」
浮かれ切った幼馴染みはすっかり忘れているようだが。
（誕生日……なんだけどな。まぁ、夏也にそんな心遣いを期待するだけ無駄なのはよーく分かってるけどさ）
千恵の肩を軽く二度叩いて、風花も席へと戻る。
（まあ、家で一人きりで過ごすよりはマシか……）
もう一度ため息をついてから、机の上の紙片を封筒にしまい、それをクリアファイルに挟んで通学かばんのポケットに突っ込んだ。

そして、“その日”の夕刻。

玄関のチャイムが鳴った。

「おーい、準備できた？」

だが、こちらの応答を待つことなく玄関の扉が開き、玄関先から夏也の声が家中に響く。

遠慮なく靴を脱いでスリッパに履き替え、断りもなくとんとんと階段を上がって来た。

「準備はできてるけどさ、……ねぇ夏也。今さらだとは思うけど、女の子が一人で暮らしてるって分かってる家にずかずか上がり込むって……デリカシーって言葉の意味、知ってる？」

「知ってる、知ってる。でも、お前相手じゃマジ今さらだろ？」

一応パーティーなのだからと、そこそこめかし込んだつもりだった千恵に、夏也はへらりと笑って言った。

その夏也は、全身真っ黒な装いの上からジャラジャラとごついシルバーアクセを幾つも身に纏っていた。それは正直――

「ちょっと、それ……悪趣味じゃない？」

「何だよ、ハロウィンて仮装パーティーなんだろ？　これ、吸血鬼（ヴァンパイア）のつもりの衣装なんだ。アクセ類はちょっと兄貴の部屋から失敬して……」

長々と己の装いについて語りに入ろうとする夏也に、千恵は

「……いいの？　早く行かないと“香奈ちゃん”のライブに間に合わないよ？」

冷たく水を差した。

そうして夏也に連れられて初めてくぐった扉の向こう。

扉を開けた瞬間、ワッと耳がおかしくなりそうな爆音の洗礼を浴びせられて怯んだ千恵の背を押し中へと入った夏也は、入口に立つ

店員に招待状(カード)を見せ、チケットを差し出す。
「ようこそ、いらっしゃいませ」
店員は受け取った紙片の代わりに、カゴに入ったキャンディーを手渡した。
「……これは？」
首を傾げた夏也に店員は意味深な笑みを浮かべる。
「今日は、ハロウィンですからね」
夏也はよく分かっていなさそうな顔をしたままそれを受け取り、千恵に押しつけて、
「俺、飲み物買ってくるから」
それだけ言うと、そのまま千恵を置いて人混みへ紛れて行ってしまった。

暗がりの中、チカチカとライトがうるさく点滅を繰り返し、自分の声すら叫ばなければ聞こえない程の大音声が狭い部屋の中を圧倒する中に、ごちゃごちゃと息が詰まる程人が溢れ返る。
その、混沌の中へと割って入っていく気にはなれず、千恵は壁に背を預け、小さく息を吐いた。
「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ！　――君、一人なの？」
そんな彼女の前に立ち、ニッと魅惑的な笑みを浮かべながら声をかけたのは――圧縮された空間に在りながら、次元の違う存在感を身に纏(まと)った白い少年……いや、青年と呼ぶべきか迷う一人の男性。
「いえ、連れが……飲み物、取りに行っていて……」
問いに答えながら、首を傾げる。
「……あなたのパートナーは？」
今日のパーティーは、男女ペアでなければ参加できないはずなのに。
「僕は特別。……すぐに分かると思うよ？」
言いながら、彼は千恵の長い髪の一房を手に取った。
「ちょっと……何を……」

それを自らの口元に運び、そっと口付ける。
その一連の動作は流れるようで。
それが、あまりに自然な仕草で。
うっかり止めるタイミングを逃し、その行為を黙って見つめているしかなかった。
彼はクスッと意地悪く笑い、
「言ったでしょ、Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ！“悪戯されたくなければお菓子を寄こせ！”……ってね。君は、僕に飴玉(キャンディー)をくれなかった」
わざと少し屈んで覗き込むような上目使いで千恵を見上げた。
破壊力のある美しい面(おもて)で。
乙女心をくすぐる表情(かお)で。
かすれたような甘い声音で。
とろけそうに甘やかなシチュエーションの中で。
――何故だろう。
心の中に、警鐘が鳴り響いた気がして。
利き過ぎの暖房で、頬は火照る様に熱いのに。
ゾクッと、冷たい何かが背筋を這い上る様な嫌な感覚を覚えた気がして。
知らず、息を詰めた。
「千恵ー？　おーい千恵、どこ行った？」
「……夏也」
人混みの向こうで聞こえた、間の抜けた幼馴染みの声が妙な緊張感を一気に弛緩させる。
詰めた息を大きく吐き出し、声の主を探して辺りを見回す。
……気付けば、彼の姿がない。
入れ替わる様に、
「ああ、いたいた。ほら、飲み物。……コーラで良かったよな？」
夏也がストローのささった透明なプラスチックカップに入った飲み物を差し出してきた。

「……うん」
「次に出てくるバンドの次が、香奈ちゃんの番なんだ。こんな端っこに居ないでもっと前に行こうぜ」
夏也は千恵の腕を掴んで、ステージ近くへ引っ張っていく。
「『杏杏(あんあん)』さん、ありがとうございました！　さぁ、次に登場するのはお待ちかねのこのバンド……『レイブンズ』だぁ！！」
司会進行のアナウンスがそう告げた途端、きゃぁぁ！　と女の子達の黄色い悲鳴が重なり、テンションが一気に膨れ上がる。
ステージ上の照明が、赤一色に切り替わり、目に痛いほどの赤い光が部屋を満たす。
――そして。ステージ上に現れた男を見て、千恵は目を見開いた。
「あれ……」
悲鳴の嵐の中、千恵の呟きを拾った夏也は面白くなさそうに、
「何だよ、お前もあれがいいのか？　ここの常連の女どもも大半がアイツのファンなんだよ。……まあ面(ツラ)が良いのは認めざるを得ないけどな。ああいう奴ってのは大体がだな――」
と愚痴りだす。
それを、遮る様に。
「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ！　今宵は俺達にピッタリの夜だ！　さあお前ら！　俺達に生贄を寄こせ！」
ヴォーカルの彼がマイクに叫び、爆音の響く部屋中に彼の声が突き刺さる。
ワッと涌いた客席から、次々に色とりどりのキャンディがステージ上に投げ込まれる。
歓声の悲鳴の中、時折「京サマ～！！）」とか、「京ク～ン！」等と叫ぶ声が混じる。
あのヴォーカルは「京(ケイ)」というらしい。
成る程、パーティーの参加者ではなく出演者だったなら確かにパートナーは要らない。
だが……気のせいだろうか。

歌いながら、彼がちらちらとこちらばかりを窺っている気がするのは――

「キャー、今、京サマと目が合った！」

「ちょっと、今私の事見なかった？」

「京クンに見つめられちゃたー」

……いや。そんな台詞が前から後ろから、右から左から、引っ切り無しに聞こえてくるという事はやはり気のせいなどではない。

そう、思った瞬間。

再び背筋を冷たいものが這いあがる。

ステージライトを一身に浴び、輝く美しい人――。

これだけ多くの女の子を惹きつけてやまない甘い面（マスク）と美しい歌声。

彼は大きなバスケットを手に持ち、中身を鷲掴（わしづか）むと、ワッとそれを客席に撒き散らした。

赤い色紙で作られた紙吹雪が、熱くたぎる人々の頭上に降る。

それを目にした千恵の心は、……本当に、何故なのだろう……冷たい手に鷲掴みにされたように縮み上がった。

「次が、俺達の最後の一曲！　聞け！　『ブラッディ・ローズ』！」

叫んだ彼は、上着の胸ポケットに挿していた真っ赤なバラを抜き取り、客席へと投げた。

――真っ直ぐ、一寸違わず、千恵へと。

目の前に迫るそれを、反射的に受け取ってしまった千恵は、手の中の真っ赤なバラを震えながら見下ろした。

本当に、血の様な色をした真っ赤なバラ。千恵は無意識に一歩、二歩とステージから後ずさった。

「――千恵？」

蒼白な顔でガタガタ震える幼馴染みの様子に怪訝な顔で夏也が声をかける。

「ゴメン、夏也。……私、もう帰るね」

三歩、四歩。

そろそろと彼の傍を離れ、くるりと身体を反転させる。
ぎゅう詰めの人と人との隙間に自分の身体をねじ込むようにして、一刻も早くその場を離れたくて逸る心を抑えながら早足に出口へ向かう。
何故かは……やはり、分からない。
けれど、何かを求める様に。千恵は出口の扉をくぐり、狭くて急なコンクリの階段を駆け上がり。
そして、空に浮かぶ月を見上げた。
ツキン、と、訳もなく心が痛む。

――グワァン、ゴゥン、グワァン、ゴォゥン……

街外れに建つ古い教会の鐘の音が、真夜中の１２時を告げる。
「……帰ろう」
凍える夜風に身を縮めながら、よく見知った街並みの中を歩き出す。

悲鳴が、聞こえた――。
そんな気がして、彼は目を開いた。
その目を上下左右に動かし、周囲の様子を探るが――目に映るのは闇色ただ一色（ひといろ）のみ。
だが、自分がひどく狭い場所に横たわっているらしい事だけは、身体に触れる硬くて冷たい感触から知れた。
吐いた吐息がすぐ目の前にあるらしい障害物に当たって、冷たい息が顔に吹きかかる。
強張り、思うように動かない手足を何とか持ち上げて、自分のすぐ真上にある障害物を押しのけ、開いた空間に満ちる空気を大きく吸い込んで。

彼はそこから上半身を起こし、左の後ろから右の後ろまで首の関節が許す限りぐるりと見回し――

「ここは……どこだ？」

茫然と呟き、そしてゆるゆると己の手に視線を落とし、開いた掌をじっと見つめ、

「私は……。私、は……？」

もう一度、周囲を見回して。……掌を、胸に当てた。

体温の感じられない、ひどく冷たい皮膚。そこには、心の臓の鼓動も感じられない。

だが、焦がれる様な熱っぽい衝動が、そこには確かにあった。

――グワァン、ゴゥン、グワァン、ゴォゥン……

突然、頭上で耳をつんざく大音声が響き渡る。

真夜中の１２時を告げる鐘の音が、無いはずの心鼓を無性に逸らせる。

（……行かなければ、ならない）

訳もなく、彼は思った。

ガチガチに固まり、出来の悪いカラクリの様にしか動かせない強張りきった全身の筋肉に鞭打って、彼は寝床（そこ）からのっそりと這い出た。

段を降り、幾列も並ぶ腰掛けと腰掛けの間の狭い通路をふらふらと、何度も腰掛けに身体をぶつけながら、その先にある出口の扉を目指して歩く。

一歩、また一歩。重たい足を運ぶ。

すぐ目の前の扉へ辿り着く――ただそれだけの行為（こと）で、体力も気力も根こそぎ失われていく様な感覚に、一歩進む毎（ごと）に次の一歩を踏み出す事を躊躇いたくなる……のに。

何故だろう。何か、どうしようもなく抗いがたい何かに惹かれる様に、彼は一歩、また一歩と歩を進める。

気の遠くなる様な。そんな一歩を重ね、重ねてようやく辿り着いた重々しい重厚な扉を、もう底をついて空っぽに近い最後の気力体力を限界まで振り絞り、全身で押し開ける。

開けた瞬間、すぐ目の前の空に浮かんだ大きな月が網膜に強く焼き付いた。

投げかけられる淡い月光が疲弊しきった身体を優しく包み、朦朧とまどろみかけていた意識を研ぎ澄ませていく。

彼は、思わず一つ大きく息を吐き出した。

よろよろと扉から離れ、荒れた砂利道を二歩、三歩、と歩いた所でがくりと崩折れ、地面に膝をついて蹲(うずくま)る。

それでも彼は疲労に震える手足を踏ん張り、再び立ち上がる。

焦がれる様な衝動は、刻一刻と時を重ねれば重ねただけ熱を帯びて燃えたぎり、“急げ、”と追い立てる。

ザリッ、と砂利の上で足を引きずるようにしながら、彼は心の指し示す方へと、精一杯の一歩を重ねていく。

「……行かなくては」

そう呟く彼の声を聞くのは、夜空に浮かぶ月だけ――……

第弐話　meet　again

ライブハウスのある駅前の通りから千恵の家までは歩いても15分ほどの距離にある。明るい時なら何でもない道のりだが、こんな時に一人で歩くのはあまり気分の良いものではない。
外気の冷たさ以上に心を占める氷塊が、重くのしかかる。
（早く帰って、暖かいホットミルクが飲みたい……）
歩く足が、早足から次第に小走りに、やがて駆け足へと逸る。
早く、早く――。
寝静まった住宅街の路地に、突如バイクのエンジン音が響いた。
それは千恵の背後から迫り、不意に路面が明るく照らし出された。
「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ！　……こんな夜道で君、また一人なの？」
「……ケ、イ、……どうして――」
「つれない彼氏の代わりに君を奪いに来たんだよ」
「な、夏也は彼氏じゃ……。ううん、そうじゃなくて……」
「……おいで、僕のイヴ」
京は、千恵の腕をとると力任せに引き寄せ、バイクの後ろに乗せた。
「さあ、今宵は僕らに似合いの夜だ」
すぐさま、アクセルを一杯に吹かし、急発進させる。
千恵は振り落とされないよう、咄嗟に京にしがみ付くしかなくて。
「僕のイヴ。君のその甘い果実を、存分に楽しませて貰おう」
囁かれた甘いセリフに脳髄が痺れる。
バイクは物凄いスピードで、港への路をひた走る。この道の先にあるのは、人気のない海辺の倉庫街だ。
こんな時間にそんな場所へ向かう理由。どう考えても、嫌な予感しかしない。
だが、猛スピードで駆けるバイクの上では、彼の身体に縋る以外、

千恵にできる事など無い。
制限速度を無視したバイクは、１０分もかからず目的地に到着した。
バイクのエンジンを切れば、そこにはただ静かな波音だけがうるさくこだまする。
冷たく強張った身体をぎこちなくバイクから降ろし、千恵はそろそろと後ずさり――倉庫の壁に背をぶつけた。
「ああ……そんなに怯えなくても大丈夫だよ。すぐに済むからさ。痛いのも初めだけだし、慣れればむしろ……」
月を背に、京の顔が迫って来る。
熱っぽい白銀の瞳が見据えるのは、千恵の首筋。
「ヤツに負わされた傷を癒して、君を見つけるまでに百年かかったんだ。……もう、我慢も限界だよ」
京の唇から漏れる冷たい吐息が、脈打つ首筋にかかる。
訳も分からないまま、硬直した千恵はギュッと目を閉じた。
両の手の手首を片手で掴まれ、頭上で固定される。
もう片方の手が、首筋にかかる髪をさらい。
その吐息も、肌に触れる皮膚の感触も、ひどく冷たくて。……とても、生きた人間のものとは思えない。
「さあ、僕のイヴ。君はどんな味がするんだろうね……？」
視界が閉ざされた分、より鋭敏に研ぎ澄まされた聴覚が、耳元でささやかれたあの甘い声音に刺激され、思考が揺らぎ、乱れる。
ただ、“嫌だ”という強い感情だけが、千恵の脳裏に強く閃いて。
ボグッ、という鈍い音と共に突然両手の拘束が剥がれ、間近にあった気配が突如遠ざかる。
「……？」
恐る恐る開いた視界に映ったのは。
先程までは確かに無かったはずの、もう一人の男の姿。
ふらふらと、立っているのがやっとであるのが傍目にも一目瞭然な様子で、男は京と千恵との間に割って入り、千恵の前に立ちはだ

かる様にこちらに背を向け京と向き合った。
その男の背を、視界に収めた瞬間。
心臓が、爆発した。それくらい強い衝撃が、千恵の胸を揺るがした。
「那由他(なゆた)……お前！　生きていたのか！？」
頬を押さえて立ち上がった京が、憎々しげに男を睨みつけながら叫んだ。
「なゆ……た……」
京が叫んだその名を耳にした時。千恵の心臓が、もう一度爆発して跳ねた。
胸の内を怒涛のように満たしていくのは、言い様のない歓喜の渦。
ナユタなんて名前を、千恵は知らない。目の前の男の姿に見覚えもない。
「那由他……お前はまた、僕の邪魔をするのか！？」
低く、京は唸る。こちらを見据える赤く燃える瞳が那由他というらしい男と千恵とを刺し貫く。
しかし、心が先程の様に恐怖に縛られる事はなく。
代わりに心を占めるのは、焦がれる様な想い。心臓は力強く脈打っては沸き立つ血潮を全身に廻らせ、冷え切っていたはずの身体に徐々に熱がこもっていく。
とろりと、甘くて暖かい優しいものが、千恵の心の隙間を埋めていく。
――分からない。もうさっきからずっと、自分の心の内に沸き起こる幾多の感情の理由が分からない。
けれど、千恵の目からはとめどなく涙があふれ、頬を流れて落ちていく。
その男(ひと)に触れたくて。
恐らく初対面であろう、誰とも分からず得体も知れない異性相手に抱くにはどう考えても不相応な想いが、何故かどうしようもなく胸の奥を焼き焦がし――千恵は、背を預けていた倉庫の壁から離れ、

一歩、踏み出した。
「やっと見つけた、僕のイヴだ！　今度こそ、邪魔はさせない！」
京が叫び、地面を蹴ったのはそれとほぼ同時だった。
瞬間、京の姿が闇に融けて消えたのを、千恵の目が捉えるのと同時に、那由他の懐に京が現れ、その横っ面を殴り飛ばし、同時にぐしゃっ、と何かが潰れるような酷く嫌な音が千恵の耳に届く。
目と耳が伝えるその情報を、千恵の脳がまともに認識するより早く、爛々と不吉に輝く赤い瞳をギラつかせた京が、千恵の背を再び倉庫の壁に張り付けた。
「さあ、僕のイヴ……僕の永久（とわ）の糧（かて）となれ……」
言いながら開いた口からこぼれる真っ白い歯列――その、上あごに生える異様に大きな対の犬歯が、千恵の首筋に迫る。
だが、今度は千恵が目を閉じるより早く、京の襟首を掴んで力任せにその身体を引き倒す那由他の、血で真っ赤に染まった顔へと入れ替わる。
スプラッタ以外の何物でもないその姿は、大の男が悲鳴を上げてもおかしくないだろう程に酷いもので。
だが、千恵は何かを考えるより前に、反射的にその顔に手を伸ばそうとした。……その彼の瞳もまた、京と同じように赤く燃えているのを、確かに目にしていたのに。
胸に浮かぶのはやはり……恐怖ではなく、言い様のない喜びで。
「……那由他！！」
しかし、彼に伸ばした手が届くより前に、彼の手を逃れて起き上がった京が振り上げた拳から千恵を庇うように立った那由他の身体に加えられた衝撃に押しつぶされて意識が飛ぶ方が早かった。
「……那由他！！」
白銀の髪を振り乱し、殴りかかって来る少年とも青年とも称せそうなその男の拳から咄嗟に背後の少女を庇う。
腹に正面から入った拳の勢いを、自由の利かないままの身体では

充分に殺し切れずに、彼の身体は背後の壁面に叩きつけられる。――当然、壁と自分の背との間に挟まれた少女も、もろともに。
せめて、押し潰してしまわぬよう、反射的に腕を引き、背と壁の間に僅かな隙間をつくる。
――が、その分、肘と肩、そして後頭部を余計に酷くぶつけ、鈍い痛みに顔をしかめる。その直後、背後の少女の身体がふわりと彼の背にもたれかかってきた。
ハッと背後を見れば、気を失い、前屈みに倒れ込もうとする少女がいて。その身体を支えるべく、無意識のうちに腕を差し出す自分が居て。
先程から幾度も連呼され、自分が那由他という名であるらしい事は察せられた。
この少女をイヴとよぶあの男が、どうやら自分と並々ならぬ因縁のある相手であるらしい事も、さすがに察している。
……だが。少女を抱き止めた瞬間、冷え切り温もるはずのない身体が一気に燃え上がったその理由が、分からない。
けれど、目が覚めた瞬間から逸り続けた衝動が、この場所で彼女の姿を網膜に映した瞬間に、大いなる安堵と、突き上げる歓喜へと昇華していくのを感じたのは確かな事実で。
「私は……。彼女は……一体……？」
きゅっと、腕に閉じ込めた少女の身体を抱きすくめるだけで、失われていた全てが、甘く暖かい優しいもので補われていく気がする。
もっと、ずっと……永遠に、こうしていられたら――。
ほんの一瞬脳裏を過った想いは、無防備に晒したままだった背に迫りくる気配に掻き消された。
那由他は、腕の中の少女を横抱きに抱えなおし、やおら振り向くと人には不可能なスピードで殴りかかって来る男に、そのすらりと長くしなやかな脚を振り上げ、脳天目掛けて踵を思い切りめり込ませた。
その滑らかな一連の動きは、それまでのぎこちないカラクリの様

だったそれとは全くの別物だった。
彼女に触れている部分から流れ込む熱が、凍りついた全身を溶かしていく。
一気に漲る“熱(エネルギー)”が、空に浮かぶ月の加護を受けて更に増大していく。
強烈な踵落としの直撃を受け、地面に叩きつけられ身体を半分固いコンクリートにめり込ませながらもまだ立ち上がろうと地面に手をついた男に向けて、那由他はその“力(エネルギー)”の塊を無造作に投げつけた。
「……！」
途方もないエネルギーの塊は地面を抉りながら滑り、そのまま海へと落ちても尚、その海面を大いに荒ぶらせながら水平線の向こうまで音速で突き抜けていく。
地べたに伏せっていた為に全身でその直撃を浴びる事こそ免れたものの、身体の半身を根こそぎ灼(や)き尽くす衝撃をまともに喰らい、京は堪らず昏倒した。
相手がピクリとも動かなくなったのを確認してから、那由他は改めて腕の中の少女を見下ろした。
肩ほどまで伸ばした黒髪も、ほんのり化粧を施したまだ少し幼さの面影の残るあどけない寝顔も、貧乳とは言わないがどちらかと言えば小ぶりな胸も、どれもがそう取り立てて言う程魅力あるものとは言い難い。
……正直、何処にでも居そうな至って普通で平凡な少女。
少なくとも、外見だけを言うならそれ以上の感想を抱くのは難しい――はず、なのに。
淡い月明かりに照らされた少女の姿は、いくら見つめ続けても飽き足りない。
腕に感じる少女の重みを、いつまでも感じていたいと思う。無いはずの心鼓が踊る、この感情を何と言うのか……。
クシュン、と腕の中の少女がくしゃみをした。

那由他は目をぱちくりさせて少女を見る。
人ではない彼が空気の寒暖を意識する事はまず無い。だから、那由他は不思議そうに首を傾げた。
だが、少女がもう一度くしゃみをし、歯をかちかち言わせながら小刻みに身体を震わすのを見て、ようやく得心がいったように頷く。
「……そうか。寒いのか」
しかしそれが分かった所でどうしろというのか。
周囲は閑散とした倉庫街と、海とが広がるばかりの場所で。
自分のこの、冷たいばかりの身体では体温で温めてやる事も出来ない。
「……仕方が無いか」
那由他は、少女の身体を片腕で抱き直し、空いたもう片方の手の親指を口に含んでプチっと犬歯を皮膚に突き立てて傷を穿ち、溢れてきた血を数滴、少女の口に含ませる。
「飲め」
そして、命じる。
「お前の記憶を――お前の家の在り処を私に示せ」
那由他は、そっと目を閉じ、脳裏に浮かんできた景色に意識を集中させる。
「そうか、お前の名は愛羽千恵（あいばちえ）と言うのだな……」
その名を、下の上で転がす。
「千恵……」
その言霊は、この世のどんな飴玉よりも甘く蕩けそうな味がした。
那由他は、もう一度丁寧に千恵を抱き直し、静かにその場を離れ、歩き出した。
その背に、月の柔らかな光の加護を存分に受けながら。
そして、その場には気を失ったままの京だけが一人、残されたまま。
月はゆるゆると宙空から西の空へと降り、東の空に太陽の訪れを

予期させる淡い青が徐々に広がりを見せる。
それを待ちわびていたカモメがうるさく鳴きながら飛び交い始める頃。
「……那由他」
むくりと、京は身体を起こした。
「那由他。イヴは、僕のものだ――」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4541z/

Eternal a Contract

2011年12月24日10時50分発行